

中国の旅といえば、1986年の上海出張が最初で、今回は7度目？になる。これまでの6度と、このたびの旅はさまざまな面で大きな違いがあり、少しこれまでの旅を振り返っておきたい。それが今回の旅の意義を、シッカリと噛みしめさせそうに思う。

32年前の上海の旅は、ビジネスマンとして最後の海外出張になった。勤めていた会社で「上海にも子会社を」ということになり、出かけたが、3つの強烈な思い出がある。まず空港に着いてから離れるまで「異文化圏にいる」ことを実感している。日本ではバブル現象が現れ始めていたが、中国はまだ農業国の様相だった。次は、アンバランスやイレギュラー。たとえば、エリザベス女王を迎えたとの郊外のホテルをあてがわれたが、フカフカの絨毯や豊富な大理石に比し、屋内を彩る鉢植え植物がいかにも貧相。次は、清貧で統一している印象。そして帰宅し、贈物を開けてビックリ、3つ共に欠陥品だった。

2度目は、最遠地が敦煌までの旅だった。まだ個人旅行は難しく、パック旅行を1人で買い占めた形で出かけ、北京からガイドと運転手の3人旅になった。ガイドは有名大学を出た人で、それが当時は就職を不自由にしていた。「3人一緒に食事」を願ったところ、中国人になりすます必要があった。現地の人と外来者では観光入場料も異なり、用いる通貨も異なっていた。莫高窟では、敦煌で迎えられたガイドに加え、莫高窟のガイドもつき、セクショナリズムを感じた。他に、田舎と都会で身分差がある国、生水が飲めない国、あるいは砂漠化が都市に向かってどんどん進んできた国、といった印象も得た。

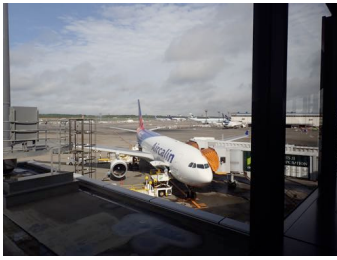
最高地に至った旅は、北京経由のチベットの旅。最多訪問地は雲南省の少数民族村での3度にわたる調査研究。前者では密教の奥深さを、後者では3000年にわたって隠れ住んできた生きる力と智慧を学び、日本人の故郷の1つを見た感を得た。

思い出の品が今もわが家で息づいている。上海で迎えられた役所の卓上を飾っていたトックリランと、成都の民家で老婆にもらったチュウゴクハウセンカ。根塊の子や種をホテルで丁寧に湯に通し、持ち帰り、育て続けて来た末裔だ。



今回の旅は、瀋陽到着後最初の丸1日で「旧」と「偽」という一文字の差異を、骨身に染み込ませるような旅になった。これは私一人の想いに留まらず、同道した7人の共感と記憶の共有となる旅になって欲しい、と切に願っている。

2018年10月23日（火）11時に関空で集合。予定通りに3時間の飛行で15:00に瀋陽の巨大な桃仙国際空港に到着。「東北三省を4泊5日で巡る歴史の旅」の始まりだ。私の要望に沿って劉穎さんがプランを組み、引率して下さった旅だが、私は名ばかりの団長。



まず、桃仙国際空港の広大さに驚かされた。次に気になったことは、漢字表記と館内放送の中国語がなければ瀋陽（旧満州国の奉天）どころか、「中国に来た」という実感さえわかenかったこと。それも当然だろう。飛行機で人間を、あるいは人間の都合で物品を運ぶという機能や、人間好みの快適性などをどんどん追求してゆけば、おのずと1つの収斂先「ヒト」好み、に向かって突き進んでゆくのではないだろうか。

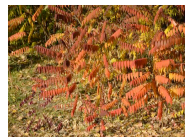
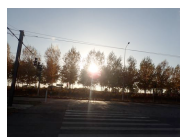


トイレで初めて、外国に来た！と実感。

振り返れば、日本は高度経済成長過程で日本中の駅前風景を似たり寄ったりにした。世界では今、工業化の進展に伴い、世界中の空港を平準化しているようだ。空港だけでなく国や地域ごとの、あるいは都市や市町村ごとの個性や特色などが次第に薄れ「ヒト」好みになっているようだ。その是非や吉凶などを「人」として考え直す機会にもしたく思った。

通関を終えに無事を知らせるようになったが、今や中国から電話で、しかもボタン操作1つで瞬時に、妻の声に触れることができる。また地球は小さくなった、と感じた。

迎いのマイクロバスに乗り込み、瀋陽の中心街に向かったが、終始窓外に眼を奪われた。「地震の心配がないのだろう」と感じた高層ビル。「京都より秋は早いようだ」と思った並木やハゼノキの紅葉。「技術力の水準」を押し量らせる構造物などを満喫。

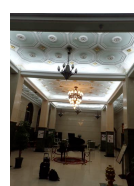
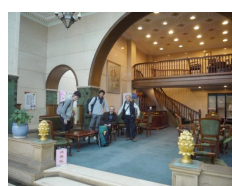
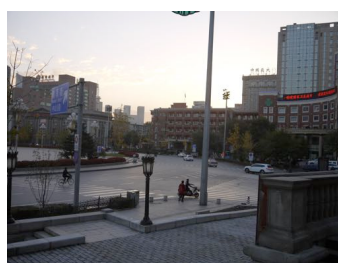


市街地に入り、地元の人たちの息遣い触れ、やっと中国を訪れていることを実感。かくして瀋陽を起点に、6人の仲間と、日中戦争の歴史の足跡を丁寧にたどりながら、日本の3.5倍もある旧満州国・現東北三省を北上し始めた。



東北三省を、私は「旧満州国」と思いこんでいた。ところが中国では「偽満州国」と表示。私は違和感を覚えると同時に「さてよ、はたしてどちらが適切なのか」と考えるようになり、旅の間に自分なりの答えを出したくなった。

ほどなく直径 100m はあろうと見た大きなロータリーに至り、その一角の、一等地と思われる位置に遼寧賓館があった。投宿する旧大和ホテルだ。下車し、トランクをさげて広い石の階段をのぼり、回転ドアに誘われて内部に踏み込み、まず劉穎さんに感謝した。このホテルで泊まる意義をたちどころに理解できたように感じたからだ。

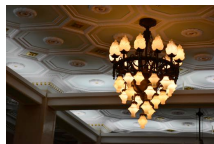


その真価は、この日から数えて 19 日後（帰国後）に、同道した 1 人・岡田さんをわが家に迎え、教えられ、初めて知り、改めて劉穎さんに感謝。ここは旧満州国時代の日本人にとっては 1 つの檜舞台であった。第 1 夜を歴史の旅にふさわしい劇的な投宿先を選んでもらえ、過ごすことができたことになる。

大きなロータリーは、今は中山広場だが、旧満州時代は奉天大広場と呼ばれていた。幼いころにしばしば耳にした地名・奉天の中心であった。おそらく、旧大和ホテルだけでなく、この一帯の街並みをかくのごとく仕立て上げたのも日本人の仕業だろう。だが、今もロータリーは交通の要所のごとしだし、街並みは今も美しく保たれている。中山広場の中央部には大きな毛沢東の立像があり、満月のごとき月光に浮かんでいた。



旧大和ホテルの内装は当時のまま、と見た。ロビーの中央にはグランドピアノがあった。そこには歴史的な貴重品との表示があり、子どものころの記憶をよみがえらせた。愛新覚羅という意味の分からなかった言葉と、若くて美しい女性の歌う姿にふれ、心惹かれた思い出だ。それは李香蘭を初めて見た映画の一場面であったわけだが、『夜来香』と、悲しげに歌うその声が今も耳にこびりついていてことに気付かされた。その時に、この若き女性の悲し気な振る舞いに幼心は心惹かれ、何らかの救援が望まれている、と受け止めて、せつない気持ちになった。今にして思えば、この感受性はまんざらではなかったようだ。岡田さんに持参してもらえたTV番組『世界 わが心の旅・李香蘭 遥かなる旅路』の録画を一緒に観賞したが、その時にそう感じた。



宿泊手続きを始めた劉穎さんに、パスポートの提出を求められ、正気に戻った。ホテルの廊下や壁面はミニ博物館のごとし。かつてロータリーの中心部にはオベリスクのような物が立っていた。2階のロビーには地球儀があり、北方4島が日本とロシアのいずれの領域にもしておらず、驚かされた。ならば尖閣諸島問題は?!? と気になった。



ロビーでくつろぎながら、ロータリーの外周には歴史的建造物の多くが保存されていることも知り、翌朝の散策に思いを馳せた。

夕食は「ホテルで…」と、なった。手荷物を部屋に置くだけで食堂に向かったが、食堂は主たる宴会場と部屋続きで、宴会場の入り口から入ると、右手にファッションショー用のごときステージがあり、左の奥に大きな円卓が幾つか設えられていた。天井が高くてゆったりした部屋で、室内装飾は当時のままだろう。きっと当時は、にぎにぎしい社交の場であったのだろう。



ゆうに10人は座れそうな円卓を仲間7人で囲みながら、なぜかまた、幼いころの記憶をよみがえらせた。それは、しばしば耳にした「満州クズレ」という言葉だった。敗戦後、そう称され、後ろ指を刺された人が、けっこういた。彼らの夢がいかなるものであったのか。この旅はその検証の旅にもなりそうだ、と私は思った。

東北名物の火鍋料理のオーダーを劉穎さんが終えた。ここで、同道願えた仲間と私のえにしの紹介となった。まず、劉穎さん。簡単には乗り気にはなってもらえなかった旅であったことを振り返った。強引に頼み込み、やっとそのプランが組まれた時に、すぐに鈴木さちよさんに同道を依頼した。だが、夫の「許可を得ないと…」となった。当然と思い、わが家がかつて「書生」のごとくに過ごした夫に電話を入れ、了承をえた。とはいえ、老人と2人の家庭夫人の海外旅行では心細い。

「そうだ」とばかりに今治に電話を入れた。20年ほど前に縁ができた宮崎陽平さんだ。彼が二十歳のころに出会い、数年前までそれきりになっていたが、今治出張時に再会し、一泊を共にした。この度も即座に応じてもらえた。これで旅行の「チームと決行」が決定。次いで、知り合って間なしの桑原恭祐さん、さらに台湾旅行で知り合い、わが国医療業界の現実を教わった医師の高安文哉さんに当旅行の予定を話すと同道が決まり、6人の旅行として手続きが完了。

その後、かつて中国にも活動拠点を得ていた岡田さんに当プランを紹介すると「私も…」となり、「ありがたい」となった。今からなら私と「ツインルームになります、よろしいか」と念を押し、チーム編成が完成。過日の台湾旅行をツインで過ごして仲だ。これで傘寿の寝坊？ の心配もなくなったし、第一妻が安心するに違いない。

食後、翌日の長春までの高速鉄道の切符を、瀋陽中央駅までとりに出掛ける必要があり、「全員で…」となった。タクシー2台に分乗したが、料金は安い。走り出してから私は不安に駆られた。案の定、駅前広場はだだっ広く、降ろされたところから大きな駅ビルが視界に入った。だが、工事中で、待合場所の目星が見つからない。後続車が着いていて当然と感じた時に「ここで待っていたのでは…」と気づき、動き始めた。随所に歩行を遮るフェンスが張り巡らされており、どこで劉穎さんは後続車を停めたのか見当が見つからない。夜分は冷え込み始めた。



とぼとぼ歩みながら、ふと「思想が形態を産みだす」との指摘があったことを思い出し、当時の街づくりに関わった日本人の想いを押し量りたくなかった。欧米カブレ、だっただろう。駅舎は大陸横断鉄道にふさわしく大きく作ったが、今日のモータリゼーションには思いが及ばず、中国の発展と相まって、今や改修工事を必要としている？

駅舎にたどり着き、分厚くて大きなビニール製の防寒用ノレン（これから冷え込みが始まるのだろう）をかき分け、構内に入ると、広い内部はガランとして薄暗かった。だが左遠方に明るい構内売店が見えた。少し近づいただけで仲間とおぼしき姿を認めた。桑原さんによれば「ここなら見つけてもらえそう、ということで」待つことになり、劉穎さんは切符売り場を探しに右方別棟へ向かった、という。

この人たちとなら「大丈夫」。日本語はもとより英語も通じそうにない街だが「はぐれても、時間を有効に活かしあえそう」と安堵した。

帰途は歩くことにしたが、それがヨカッタ。街の随所に中華流のコンビニなどがあり、果物などには価格表示がなく、値を吹っ掛けられることがある。それが逆に、地に足がついた気分させ、足取りも軽くなった。信号はあるが、守らなくてもよい。

翌朝は、岡田さんと4時からさまざまな話題を楽しみながら夜明けを待った。中山広場に出かけ、ロータリーの外周歩道に沿って立ち並ぶ歴史的建物跡を見て回ることにした。満州建国は「五族協和」や「王道楽土」を謳いあげ、国民に広く移民を勧めた。だが結果は、**はかなき夢**に終わったが、この旅は「その実態を垣間見て、その原因を押し量る旅」でもある、と心を新たにした。右回りに歩み始めた。

当時の建物は、今も保存・補修されているようだが、ことごとく「偽」との冠がつく表示板が掲げられており、当初は違和感を覚えた。だが、たちまちにして得心に改めざるを得ない、と感じた。「満州クズレ」と呼ばれることになった人たちの当時の

意図が透けて見えそうな気分にしたからだ。その想いは、関東軍と東洋拓殖株式会社が、つまり軍と英名Oriental Development Co.と称した国策会社が同じ建物に同居していたことを知り得た時に、頂点に達した。



今は昔、当時の権力者（偽満州のいわば統治者）の末裔は「杏下で冠を製さず」と言っていて登壇しながら、「仕事の話は一切しないことにしている」などとうそぶき、不正をうやむやにしつつある。さもありません、と思った。当時の手口は、これに逆らう者は現共謀罪法の雛形のごとき法を適用し、とっ捕まえ、密室で始末できた時代だ。不透明で、今より横柄なことが生じなかったはずがない。その当事者の一方が国民に「旧」と称する印象を刷り込み、他の一方が「偽」と主張しているわけで、第三者の公正な判断を尊重し、いずれかに改めないといけな。いまや人間は「ヒト」から「人」へと収斂のし直しが求められつつある。怠ると、また遅れてしまいかねない。

それはともかく、外周を一巡する見学を終え、ロータリーの車道を横切って中山広場に踏みこむと、太極拳に興じる人たちがいた。

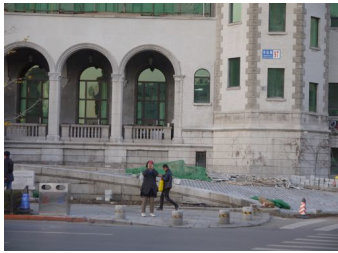


毛沢東の大きな立像が朝日を受けており、その足元を八路軍とおぼしき群像が取り囲んでいた。その多様性と共通性にしばし惹きつけられた。多様性は、性別や年齢、あるいは手にする武器、道具、あるいは服装など。共通性は、引き締まった表情と、遠方に焦点を絞った眼差しだ。その多様性と共通性が醸し出すエネルギー（意志、勇氣、あるいは活力）のほどを押し量りたくなった

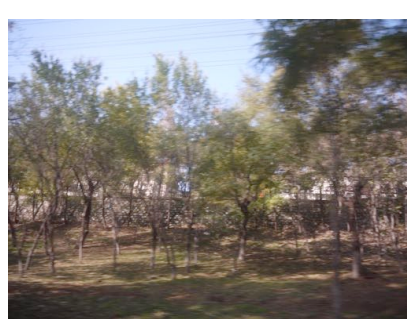


この共通性に相当する大事な目には見えない何かを、「満州クズレ」はどう見ていたのか。共感の追求になぜ努めなかったのか。「五族協和」や「王道楽土」を謳いながら、どうして小中学校などを日満人で分けて作るなど、逆行したのか。なぜか、ふと、子どもの頃にしばしば浴びせられた母の叱責（お天道さまが見てござる、井の中の蛙、あるいは一寸の虫にも五分の魂など）を思い出した。

半時間ほどの間にロータリーでは車の流れが激しくなっており、それを横切って中山広場から外周の歩道まで至る渡河は、それなりのリスクと読みを要した。その足でホテルの食堂にむかい、東北風バイキングの朝食を7人そろって味わった。とはいえ、皆さんの味わい方は思い思いで、それが私には一際楽しげに思われた。



専用バスでの2日目の訪問先・撫順西露天参観台を目指し、8時半に出発。その施設の展望台から眺望できるという広大な露天掘りの炭鉱を想像しながら、終始窓外の光景に眼を馳せた。やがて露店商が並び、野菜など農産物や籠に閉じ込めた鶏などを売っている光景を通り過ぎ、広大な地域に出た。やがてフェンスで囲った公園のごとき施設に至った。富裕層が住まう地区のようだ。アメリカのゲイテッドハウスを連想した。



満鉄が経営した事業の一端・撫順炭鉱の実態を学ぶことになった。満鉄のあの流線型の「アジア号」を駆動させるにも必要な石炭を掘り出していたのだろう。ほどなく撫順西露天参観台に到着。展望塔が目に入った。とても高い。



この炭田が日本人の手で運営されていた頃の様子が手に取るように分かる写真、説明書、模型、あるいは現物などを目にするようになる。劉穎さんはマスクをかけず、案内に当たった。この事業は、日本の軍隊が一体となって展開していた様子も理解できた。当時、そうした様子が一部始終、外国のメディアによって世界中に知らされていたことも知った。



やがて、苛酷で危険な労働とその執拗な強要に加え、婦女子まで殺傷する残酷な光景を示す等身大の模型に至り、次いで大きな写真が、おぞましきことが展開されたことを推し量らせた。私はうかつにもこうした事実をまったく知らなかった。日本ではメディアも丁寧には報道しておらず、国家は学校で教えていないのではないか。表現の自由や知る権利の無視か、あるいは学習意欲の不足か。いずれにせよマズイ。そう思うだけに「誇張」であってほしい、できれば「ねつ造」であってほしい、と願わずにはおれなかった。



やがて主客をひっくり返して眺め得るコーナーに至り、不思議なことにホッとした。実は、かつて私は特攻隊に憧れるほどの国粋主義だったが、そのころを振り返った上に、「ヒト」と「人」に分けて心を整理し直し、パッと心が開いたようで、楽しかった次第。



エレベーターで展望台に出た。まず大きな全景写真が目飛び込んできた。「スゴイ！」。次いで、ガラス越しに広大な露天掘りの炭田を望んだ。豆粒のように見える重機や、長くても細いヘビのように感じた貨物車両がうごめいていた。眼をこらして立ち働く人の姿を探したが、細菌かのごとく、小さくて認めにくい。この時の第一印象は、「人類に触まれつつある地球」の姿、あるいは「宇宙船地球号の病巣」かのごとく、私には感じられた。いずれは、埋め戻されて緑地には戻らず、放置されるのではないか。

